



TITLE:

弥生時代水田研究のあゆみと課題

AUTHOR(S):

伊藤, 淳史

CITATION:

伊藤, 淳史. 弥生時代水田研究のあゆみと課題. 魂の考古学 --豆谷和之さん追悼論文編-- 2016: 199-208

ISSUE DATE:

2016-05-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218977>

RIGHT:

発行元の許可を得て登録しています.

弥生時代水田研究のあゆみと課題

伊藤淳史

1. はじめに—問題の所在

弥生時代が、「日本で食糧生産を基礎とする生活が開始された時代」である、との定義が提唱されてから、すでに40年が経過しようとしている〔佐原1975〕。その後に夥しい情報の蓄積をみて、生産のありようの多様性が明らかになっているとはいうものの、多くの地域で根幹として水稻農耕社会を想定することに、大きな誤りはないであろう。なかでも、本州島北端から九州にいたるまで、遺構としての水田跡が確認されたことは、それに関連するさまざまな分析手法の発展と深化とあわせて、水田研究が弥生時代研究にとって重要な位置を占める分野であるという確かな認識をもたらしたといえよう。

とはいへ、ひとくちに水田研究と言っても、きわめて多様な側面をもっている。水が不可欠な生産遺跡（耕作地跡）という特性から、外見的な遺構形状の検討にとどまらず、自然地理学、地質学、土壌学、農学、等々多方面からのアプローチが可能であり、学際的・総合的な性格を本来的に備えているのが水田研究である、とも評価できよう。そして、その多様さのために、重要分野でありながら、考古学研究の中での位置づけや方向性を見通すことが困難になってはいないだろうか。

そこで本稿においては、列島においての考古学分野にかかわる水田研究の流れと系譜を筆者なりに整理し、現状把握と課題の提出を行うことにしたい。その際には、弥生時代研究との関連性をもっとも意識したものとする。もとより、水田遺跡の調査はそれ以後の時代も対象とされているわけであるが、現実には水田研究に注がれる労力の多くの部分は、農耕社会黎明期の様相解明の手段としての弥生時代水田の研究に、注がれているからである。

2. 弥生水田研究のあゆみ—流れと系譜の整理

主要な水田遺跡の調査年次とともに、水田研究に関連する諸論考を中心に内容区分と年次で整理して参考文献一覧とともにまとめたものを作成した（図1）。これらすべてについて言及することは出来ないけれども、以後参照していただきたい。

2.1 「見えざる水田」の時代—日高遺跡以前

現在私たちが弥生水田の典型として認識しているのは、いわゆる「小区画水田」である

が、それは群馬県日高遺跡における調査と報告（1977～78年）からである。それ以前では、具体的な遺構をともなった水田遺跡と言えば静岡県登呂遺跡（1947～48年）が唯一であった（滋賀県大中の湖遺跡や岡山県津島遺跡といった1960年代の調査で、水田址の可能性が言及されている事例はあるが）。したがって、研究史的にもここで完全に2分するのが妥当であろう。日高以前・日高以後、と呼んでおく。

そのような日高以前の段階は、「あるはずの水田」「見えざる水田」を前提として、しかし登呂遺跡の様相を歴史的発展段階の中に位置づけるべく、考察が進められている。注目すべきは、具体的資料を欠いた中にありながら、1950年代という早い段階から、集団や社会構造を検討するうえで水田が重要な資料であるという認識にたって議論が進められている点である。すなわち、近藤義郎氏は、登呂の水田と灌漑施設を、弥生後期における自然灌漑克服や田植えの可能性といった技術革新の結果ととらえ、その前段階の前期は低湿地、中期以降における灌漑排水技術の進展、という流れを想定する〔近藤1957〕。そして、単位集団の想定、つまり住居5棟＋倉庫程度の集団が経営と消費の基本単位とする前提には、周囲にある（はずの）谷水田の経営が想定される〔近藤1959〕。

農業技術の発達史という観点については、耕作技術などの具体的な面とは別に、遺跡の立地や周辺環境に着目し、その変化が生業変化すなわち農耕社会への移行を反映するものととらえる研究がみられる。水田遺構が見つかっていない早い段階から、この観点への言及は認められるのであって、たとえば藤岡謙二郎氏は、唐古遺跡の報告において、大和盆地における縄文遺跡と弥生遺跡の立地の差異を指摘するとともに〔藤岡1943〕、初期の水稻農業と低湿地遺跡とを関連づけている〔藤岡1946〕。また井関弘太郎氏は、愛知県瓜郷遺跡や登呂遺跡、そして長野県平出遺跡周辺の土地条件を比較し、立地の変遷から生産様式やその発展段階を追究する研究の方向性を明確に打ち出している〔井関1953〕。

こうした流れのなかで、八賀晋氏により、水田そのものの土地条件を類型化し比較する研究があらわれる〔八賀1968〕。もっとも、ここには、「見えざる水田」をもとに、現状の水田土壌環境から遡及して過去のそれを類推するという手法をとらざるを得ないという限界があった。とはいへこの議論は、土壌類型（グライ層土壌群・灰色土壌・灰褐色土壌）と地下水位による水田類型（地下水型・中間型・表面水型）の対応を整理し、湿田・半湿田・乾田という水田類型と時期を追っての遺跡分布との相関から開発技術の発展段階を論じる方向性など、土壌学など関連分野の知見を考古学に援用する重要性・有効性を認識させる端緒となった研究といえる。現在に至るまで影響を保持する画期的なものと評価できよう。

もう一点、日高以前からの研究視点として取り上げておきたいのは、水田からの生産力復元、という社会経済史的な視点である。大きくとらえれば、前記した集団や社会研究のための水田研究という範疇に包括されるともいえるかもしれない。乙益重隆氏は、登呂遺跡の報告時点における杉原荘介氏の算出を修正するという形で、沢田吾一氏の『奈良朝時

代民政経済の数的研究』(1927年・1972年復刻)にもとづいた奈良時代の水田等級別の収穫量や扶養人口・労働人口想定を参照しつつ、登呂ムラの収穫量と人口をさまざまな条件でシミュレートした。結果として、人口50～60人程度とすると、中田級の扶養人口以下では経営困難、ということで、他の伝統食糧への依存が示唆されている〔乙益1978〕。ほぼ登呂遺跡の資料のみでの検討ではあったが、ここで採用された手法や問題意識については、その後も連綿と継承されて現在に至っているといえる。

以上、「日高以前」の段階における水田研究の方向性を示す代表例と考えるものを挙げた。登呂遺跡以外の水田の実態が不明な中で、集団や社会構造を追究する方向性と、学際的な農業技術史的研究の方向性という、現在の水田研究につながる2つの主要な流れがすでにはっきりあらわれていることを、あらためて確認しておきたい。

2.2 事例の激増—日高以後、登呂シンポ(1988)まで

日高遺跡の発見により「小区画水田」の実際が判明して以後、九州～本州北部にかけての各地で、水田遺跡の発見例が飛躍的に増加する。実資料(実例)にもとづく研究はこの段階からスタートしたといつて良い。そこから現在までの研究動向を概観すると、最初の10年間程度、登呂遺跡発掘40周年を記念して日本考古学協会によるシンポジウムが開催される1988年ごろまでは、新出例の集成と分類・評価に力点が置かれた段階、と言えるだろう。そして、そのなかで、「見えざる水田」にもとづいてされていた水田類型や発達段階の想定が、実例を得ることによって検証され、実証的に深化していった段階ともとらえられる。したがって、集団論・社会論への指向よりも、農業技術史のための水田研究、という指向が強く認められることになる。

この段階を象徴する典型的研究として、良く知られた都出比呂志氏の論考を挙げたい〔都出1983〕。そのなかでは、水田の類型をA:大区画(板付・登呂)とB:小区画(服部ほか)に大別し、後者についてを細分する。この後者の細分は、おもに群馬県下の火山灰下の古墳時代以降水田に顕著な極小区画が充てられている。そして、初期よりこの**A・B2類型**は系譜として存在し、発展段階的なものではないと位置づけている。はっきりとした具体的な遺構分類を設定し、それを農業生産や技術の発展という視角で体系的な位置づけを試みた点で、水田研究の上では画期を成す論考と言えるのは間違いないであろう。けれども、その後この問題が再論された総括的著作においても〔都出1989, pp. 60-99〕、設定された農業発展の画期と水田の類型区分がどのように関連するのかについては、明示されていない。農業技術史の資料として水田遺跡の重要性を繰り返し指摘しつつも、方格地割や条里制などのような耕地所有や政治支配の顕現としての遺構と系譜や性格としてつながり得るのか、といった議論に主要な関心が払われている。

80年代でも後半になると、多様な条件下の水田遺構が明らかになるにつれて、八賀氏が当初示していたような、初期の湿田(グライ土壌)からの素朴な技術発展の修正が強調

される論考が主流となってくる。山崎純男氏による北部九州の初期水田についての区分や〔山崎 1988〕、田崎博之氏の分類〔田崎 1989〕が、主要なものとして挙げられよう。これらは、畦畔区画などの遺構形態よりも立地や土地条件（地下水位や土壌）への対応を重視した水田分類である。初期水田の事例もふまえ、水稻農耕の導入の当初から環境に柔軟に対応する高い技術力を有したものであった、とする評価が積極的に主張されていく。このように、土地への関わり方の技術的発達段階を読み取ろうという基本姿勢は、農業技術や栽培技術の系譜と進展をもとに弥生社会を考える方向性、そのための水田遺跡研究、という意識をいっそう強め、その一方で集団論との接点は薄くなっていったといえよう。

このように、この段階では、水田遺跡や遺構から社会構造や集団組織を読み取ろうとする試みは現れていなかった。ただし、広瀬和雄氏によって提出された、水利と集団の関係についての論考は、その後に大きな影響を与える重要な視点として触れておかねばならない。すなわち、水口共有集団・堰共有集団・河川共有集団、という3つのレベルの集団関係の想定である〔広瀬 1988〕。ここで広瀬氏は、こうした関係を支える灌漑技術は弥生時代当初から存在することをふまえつつ、このシステムこそが集団間の格差拡大と集団の分立を促進するものであったと主張した。土地条件による規定に関心が偏ってきた農耕遺跡の研究にとって、それとは異なる条件（すなわち水利）が、社会構造の変化を検討するうえでの重要な要素であること、それが具体的遺構から示しうる可能性に、認識を促したのである。

2.3 個別遺跡・遺構分析の深化—1990年代～2000年代初頭まで

90年代以降も事例の増加は続くが、集成や水田を扱う広域研究会などによって、列島の状況が一通り把握されたかのような段階にあつて、大阪府池島・福万寺遺跡の広大で通時的な成果が公表されていくことになる。そして、それにもとづく詳細な遺構分類や学際的な検討結果が発表されるとともに、こうした個別遺跡や小地域やに焦点をあてた水田研究からの提言が各地で顕在化し、現在の研究への基盤となっていくのが、2000年はじめごろまでにかけての段階である。またそれは、弥生都市論や集団構造についての新たな提言と議論が活発化する時期と、ほぼ並行している。

池島・福万寺遺跡の成果を積極的に水田研究として発信し、その後の基盤を築かれたのは江浦洋氏である。広域で小区画水田が把握された弥生後期水田面を中心に、微地形に応じた諸施設や水利系統、水田ブロックの復元抽出作業を行うとともに、畦畔の接合方法に着目した細分が呈示されたのである〔江浦 1991・1994〕。なかでも、「六角形小区画」と呼ぶ畦畔接合方法（B4類）を見いだし、段丘上への開発の展開を可能とする造成技術にもとづくもの、として後期に出現・定型化し列島に普及していく状況を示したことは、遺構形態にもとづく水田研究を大きく前進させたといえる。

ただし江浦氏は、水田開拓地の拡大をもたらす技術上の変革として、後期段階の畦畔形

態の変化を意義づけており、集団論や社会構造の議論には踏み込んでいない。氏が基礎を据えた水田ブロックや水利復元をもとに、その側面を発展させたのが井上智弘氏である〔井上 2002〕。井上氏は、池島・福万寺遺跡における前期以来の水田域構成や地形形成の過程を精緻にたどりつつ、後期面に認められる比較的面積の類似した範囲の水田を、耕作の最小単位として「ブロック」、それが3～4つ合わさった単位で水利において密接に関係を有する「ユニット」、こうしたユニットが整然と配置された範囲を「ゾーン」と呼称して水田開発単位と考え、遺跡全体の重層的な水田構成を復元した。同時に、さきの広瀬氏の想定した3レベルの集団関係と関連づけ、各世帯の耕作単位としてのブロックが水口共有集団、その複数集まったユニットが堰共有集団、といった対応を示唆し、弥生後期段階のこうした重層的水田構成の確立は、水田経営のあり方の変化を反映するものであって、造成技術の変化がもたらすものではない、と指摘した。

このように、地形条件や技術段階だけでなく、耕作集団との関わりの観点からも水田跡を研究するべき、という方向性を明確に打ち出された研究は、「見えざる水田」段階以後には忘却されていたかのような水田研究と集団論との接点をよみがえらせる、きわめて重要なものであったと評価できよう。同じ頃には、佐賀県吉野ヶ里遺跡や大阪府池上遺跡の調査成果などをベースとした「弥生大形環濠集落都市論」の提起〔例えば、広瀬 1998〕、それに関連する批判としての若林邦彦氏による「基礎集団論」の提出〔若林 2001〕といった、弥生時代の集落の実像の検証、集落－集団関係の再考、集団構造や単位集団論の見直しの議論が活発化していた。こうした研究視点が打ち出されてきた背景として、取り上げておきたい。いずれにせよ、この2000年前後の動向が、水田研究にとっても大きな転換点であったと考えられる。

2.4 集落論・集団論・地域社会論との連携—現在まで

この10年あまりの間、池島・福万寺遺跡の調査が終息する一方で、奈良県秋津・中西遺跡のように大和盆地南部に新たに広大な面積の弥生前期水田の検出があるなど、事例の増加は継続している。このように進行し続ける情報の蓄積のなかで、地形変遷の過程や空間利用の状況をより精緻に復元する姿勢は、特に河内平野低地部などでは徹底され、水田遺跡に限らず、集落や集団を検討するに際しても、その成果を前提にすることが基本となってきた。実証度の高い研究を指向するに際しては、地質考古学的な練度を高めようという意識が確立されている、ということができる。こうした意識は、水田研究にとっては伝統的な、土地条件や環境に焦点をあてる農業技術史的な方向性には十分な親和性があるけれども、社会構造や集団の議論に直接は役立てにくいともいえよう。しかし、その成果を積極的に活用した成果が呈示されつつ、現在に至っている。

大庭重信氏は、水利が媒介する集団関係という広瀬氏の視点を継承し、また井上氏の分類をベースとして、広域で良好に把握可能な調査事例をもとづいて、水路の配置や水利系

統、ブロック間の関係を復元整理し、弥生時代における変遷を示した〔大庭 2013〕。すなわち水路は、水源から水田域への給水形態に応じて「単線水路」「幹線水路」「分岐型幹線水路」と区分され、それらと水田ブロックやユニットとの接続関係により、Ⅰ～Ⅲ類の水田モデルが設定され、具体例にもとづき検証されている。井上氏の段階では、水田遺構の単位と集団規模の関係にとどまっていたものを、水利系統の分類と有機的に結びつけたことで、水田の経営主体である集団の単位や集団間の関係を図式化することに成功した、と評価できよう。これにより、例えばⅢ類とされるような水利の重層化した計画的な水田ゾーンの形成は、後期に成立し、統括する首長の出現を背景に想定しうる、といった指摘が可能になったのである。

また、この成果もふまえつつ、河内平野南部の小地域において、弥生時代における微地形と土地条件の変遷と集落や生産域の動態の関連を復元し、社会変動の内実を検証する試みも示されている〔大庭 2014〕。ここでは、土壌条件に基づいた生産領域やそこからの生産量の復元算出も加味され、集住や分散という後期までの集落形態の変化が、農業生産や土地利用と密接に関連することが示され、要因としての環境変動（その結果としての地形変化）が示唆されることになった。集落形態が水田経営のレベルと相関するという指摘は、すでに秋山浩三氏が行っているが〔秋山 2007、pp. 677-698〕、ここではそれが精細な地形復元と遺構動態によって実証的に示された、とみることができよう。

以上の大庭氏の論考は、古河内湖南岸というフィールドの特性とデータの蓄積を十分に活かしたものと評価される。それとともに、水田研究のみならず、それも含めた地域社会の変容を総合的実証的に明らかにするひとつのスタイルとして、今後、同種の条件が備わった空間であれば、主流となっていく方向性と思われる。

3. おわりに一課題・展望とあわせて

以上、現状の到達点と思われる段階まで、ごく大ざっぱに筆者の関心を寄せた研究を中心に、流れを追った。あらためて簡潔にまとめるならば、1960～70年代の「見えざる水田」の時代において、立地や環境から生産力や集団の問題に積極的なアプローチと仮説の提唱がなされた段階から、遺構の実例が増加するにつれその側面は薄れ、土壌学等の知見を積極的に取り入れた農業技術史的な関心の研究が主流化していた。それが今世紀に入ると再びかつてのアプローチ、すなわち社会や集団を研究するための水田研究・水田資料、という関心が復活し、蓄積された情報を駆使して実証的に解明しようという形をとってあらわれている、といったことになる。

もちろん、農業技術史的研究も、上記の流れの中で沈滞したわけではなく、むしろ水田研究の中では基礎を支える必須分野として、継続的に業績が積み重ねられてきているとあってよいし、それらの研究史上での意義を決して軽んじるわけではない。ただ、事実を明らかにするという点では、水田遺跡の立地や土地条件は学際的検討から詳細に分類され

てしかるべきであるけれども、現実の水田遺跡は多様な土地条件に対応するものであって、条件を細分すればするほど水田遺跡の分類も増加し、煩雑で曖昧な分類体系を招く負のスパイラルに陥りかねない。ゆえに本稿では、今後の考古学研究、とくに水田以外の諸研究、集落や墓制等々との総合を果たしていく上で、どの方向性がもっとも重要であるかを考慮した際、集団や社会構造の解明を指向する方向性を進展させていくのが妥当な道筋であろう、という認識にたつて、それにかかわる研究を中心にとりあげてきた。

では、方向性をこのように選択するとして、どのような課題があるだろうか。

求められるのは、集団と水田との対応関係をモデル化して検証する、それを指標とした水田分類を試行することであり、遺構の形状にもとづく分類や立地や土地条件にもとづくそれとも最終的には掛け合わせて、複合的な類型を提出できれば理想的だろう。その際には、個別の水田遺跡・水田遺構の分析にとどまらず、それらを水系や地域単位での地形変遷や遺跡動態の中で検討する作業、地域社会論の中に水田を水系とともに位置づける視点が求められるだろう。となれば、それにふさわしい空間の設定や地域選択が問われることになるけれども、調査が進捗してデータが十分に整い分析に耐える空間となると、決して多くはない。同じレベルで考察可能な地域を、研究する側としては丹念に見極め情報を精査して見極めていくのはもちろんであるが、調査との連携によって、可能なフィールドを増やしていく意識も必要となろう。

現実には、行政的要請に応じた発掘調査がほとんどを占めている現在、遺跡情報の提出には非常に多くの関係者が介在している。以上のような意識の共有には、水田や生産領域の研究にとって必要な情報標準のようなものが、整備されていることが望ましいと感じられる。文化庁監修の『発掘調査のてびき』には一定量の項目が挙げられているけれども、遺跡の土地条件や地形環境の変遷をふまえた議論が前提となっている現状では、層序や堆積の認識や鑑識眼の重要性がいっそう増している。比較検討の水準を整え、実証としての基盤を固めた上での社会構造の議論こそが求められる、といえようか。

以上、課題と言っても抽象的な話題に終始してきた。弥生水田という点では、列島ではじまりや系譜といった問題が常に関心を払われてきたところで、その場合は、北部九州における初期水田遺跡の実態が注目されてきた。しかしながら、現状では、水路や護岸にみる卓抜した土木技術の水準が評価されるものの、畦畔区画といった面では近畿～中国地方の事例と特徴に大きな開きがあるようにも思われる。これがはたして資料状況の違いに由来するだけの相違なのか、背後の社会構造の差異を反映する実態なのか、重要で興味深い問題であろう。水田を造成する技術水準にとらわれることなく、また起源や系譜の問題にとどまることなく、水田経営という視点での構造的な比較にも取り組んでいく必要を指摘しつつ、ひとまず稿を閉じることにしたい。

年次 調査等	社会論・集団論への関与 (社会構造)(集団)(経営形態)(生産力)	折衷・総合	農業技術史重視 (土地条件・立地・環境・栽培技術) (遺構形態)	その他
1947-48 登呂	近藤 1957 近藤 1959			
1965-66 大中の湖				
1968-69 津島			八賀 1968	
1970 森本				
1976-77 日高	乙益 1978			佐原 1975
1974-79 股部				
1976- 百間川				
1977-78 板付	寺澤・寺澤 1981			
1980 森畑				
1979-83 山賀ほか				
1982-83 垂柳				
1983- 玉津田中	寺澤 1986			
1984-88 砂沢				
1985- 池島・福万寺				
1986 津島江道	広瀬 1988			
		工業 1988 高谷ほか 1988 森岡 1988 都出 1989	山崎 1987 八賀 1988 田崎 1989	
1988 日本考古学協会設立 40 周年記念シンポ 『日本における稲作農耕の起源と展開』		工業 1991	江浦 1991 江浦 1994	広瀬 1998
1991 第 30 回埋蔵文化財研究集会 『各地域における米づくりの開始』	安藤 1992			
1997-03 登呂再調査	井上 2002 藤原 2002	森岡 2004	田崎 2002 斎野 2005 廣瀬 2007	若林 2001
	秋山 2007			
2009- 秋津・中西	若狭 2012	安藤 2009 設楽 2009	井上 2011 江浦 2012 佐藤 2013 江浦 2014	
	大庭 2013 大庭 2014			
	廣瀬 2015			

図 1 弥生時代水田研究のあゆみ・関連文献の年次と分類 (文献名は参考文献に記載)

【参考文献】

- 藤岡謙二郎 1943 「第二章 遺跡地の地理と地形」末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊）
- 藤岡謙二郎 1946 『地理と古代文化』（古文化叢刊5）大八洲出版
- 井関弘太郎 1953 「日本の初期農業村落の立地に関する若干の問題」『名古屋大学文学部研究論集』V（史学・2）
- 近藤義郎 1957 「弥生水稲農業の技術的達成について」『私たちの考古学』第4巻3号
- 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『私たちの考古学』第6巻1号
- 八賀 晋 1968 「古代における水田開発—その土壌的環境—」『日本史研究』第96号
- 乙益重隆 1978 「弥生農業の生産力と労働力」『考古学研究』第25巻2号
- 佐原 眞 1975 「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史1 原始および古代1』
- 寺澤 薫・寺澤知子 1981 「弥生時代植物質食料の基礎的研究—初期農耕社会の前提として」『樞原考古学研究所紀要 考古学論攷第5冊』
- 都出比呂志 1983 「古代水田の二つの型」『展望・アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集』（都出1989）pp.43-60に再録）
- 寺澤 薫 1986 「稲作技術と弥生の農業」『日本の古代』第4巻縄文・弥生の生活 中央公論社
- 山崎純男 1987 「北部九州における初期水田—開田地の選択と水田構造の検討—」『九州文化史研究所紀要』32号
- 工楽善通 1988 「2. 水田と畑」『弥生文化の研究』2・生業 雄山閣
- 高谷好一ほか 1988 『古代稲作農耕の学際的研究』（科学研究費補助金総合研究A成果報告・水田遺構集成）
- 八賀 晋 1988 「1. 水田土壌と立地」『弥生文化の研究』2・生業 雄山閣
- 広瀬和雄 1988 「3. 堰と水路」『弥生文化の研究』2・生業 雄山閣
- 森岡秀人 1988 「近畿地方における稲作農耕の起源と展開」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』（日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム）
- 田崎博之 1989 「地形と土と水田」『古代史復元』4・弥生農村の誕生 講談社
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 江浦 洋 1991 「弥生時代水田の総合的理解のための基礎作業Ⅰ」『大阪文化財研究』第2号
- 工楽善通 1991 『水田の考古学』（UP 考古学選書12）東京大学出版会
- 安藤広道 1992 「弥生時代水田の立地と面積—横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落群からの試算」『史学』第62巻1・2号
- 井上智博 1994 「池島・福万寺遺跡における水稲農耕のはじまり—水稲農耕の定着過程を考えるために基礎研究Ⅰ—」『大阪文化財研究』第4号
- 江浦 洋 1994 「小区画水田造成技術の変革—六角形小区画水田の提唱」『文化財学論集』
- 広瀬和雄 1998 「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻3号
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第12号
- 井上智博 2002 「弥生時代における水田開発・経営の動態」『池島・福万寺遺跡2』分析・考察編（（財）大阪府文化財センター調査報告書第79集）
- 藤原 哲 2002 「弥生集落の農業経済力」『考古学研究』第49巻3号
- 田崎博之 2002 「日本列島の水田稲作—紀元前1千年紀からの検討—」『東アジアと日本の考古学』Ⅳ・生業 同成社
- 森岡秀人 2004 「前田遺跡弥生前期水田跡をめぐる二、三の問題」『前田遺跡（第20地点）発掘調

- 査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利動態—』（芦屋市文化財調査報告第 52 集）
- 斎野裕彦 2005 「水田跡の構造と理解」『古代文化』第 57 巻 5 号
- 秋山浩三 2007 「第四章 水田経営の進展と集落」『弥生大型農耕集落の研究』青木書店
- 廣瀬時習 2007 「弥生水田の一樣相—池島・福万寺遺跡における事例から—」『考古学に学ぶ』（Ⅲ）
（同志社大学考古学シリーズⅨ・森浩一先生傘寿記念論文集）
- 安藤広道 2009 「弥生農耕の特質」『弥生時代の考古学』5・食糧の獲得と生産 同成社
- 設楽博巳 2009 「総論」『弥生時代の考古学』5・食糧の獲得と生産 同成社
- 井上智博 2011 「土地環境の変化」『弥生時代の考古学』3・多様化する弥生文化 同成社
- 江浦 洋 2012 「水田と畠の耕作」『古墳時代の考古学』5・時代を支えた生産と技術 同成社
- 若狭 徹 2012 「耕地開発と集団関係の再編」『古墳時代の考古学』7・内外の交流と時代の潮流、同成社
- 大庭重信 2013 「近畿地方における弥生時代の水利関係と水田構成の変遷」『待兼山論争』第 47 号
史学篇
- 佐藤洋一郎 2013 「水田の景観 2000 年の変遷史」『日本史研究』第 607 号
- 江浦 洋 2014 「古墳出現期の農業基盤—水田造成技術の変革と畠の出現と展開—」『弥生文化博物館研究報告』第 7 集
- 大庭重信 2014 「河内平野南部の弥生時代集落景観と土地利用」『日本考古学』第 38 号
- 廣瀬時習 2015 「弥生時代の農業生産力を考える」『弥生研究の交差点』（みずほ別冊 2）

魂の考古学

—豆谷和之さん追悼論文編—

2016 年 5 月 29 日発行

編集・発行 豆谷和之さん追悼事業会

奈良県天理市永原町 128 番地 1

埋蔵文化財天理教調査団内

印刷 富光株式会社

奈良県天理市櫛本町 2272 番地 2